



TITLE:

# 東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成

AUTHOR(S):

吉川, 利治; 桃木, 至朗; 渡辺, 佳成; 菅谷, 成子

---

CITATION:

吉川, 利治 ...[et al]. 東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1995, 7: 89-96

ISSUE DATE:

1995-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187483>

RIGHT:

# 東南アジアの言語資料に見る国家意識の形成

## 1. 研究組織

研究代表者：吉川 利治（大阪外国語大学外国語学部・教授）

研究分担者：桃木 至朗（大阪大学文学部・助教授）

渡辺 佳成（岡山大学文学部・助教授）

菅谷 成子（名古屋女子大学短期大学部・助教授）

## 2. 研究のねらい・目的

本研究は重点領域研究「総合地域研究の手法確立」における「外文明と内世界」に関連する課題として、主に東南アジアの言語資料を用いて国家意識の形成を研究対象にする。すでに研究メンバーは東南アジアの国家の形成に関心をもち個々に論文を発表してきた。重点領域研究では、東南アジアの主要国家が醸成してきた国家意識の歴史的展開に焦点をあて、国家観の普遍性と固有性、正統性原理、また国家や民族間の力関係のなかで組まれたネットワーク、外圧への抵抗という外因と少数民族や移民の同化吸収という内因による国家イデオロギーの構築など、近代国家の形成に至る精神的基盤の史的研究をめざす。

吉川は、とりわけスコタイ王朝時代のラームカムヘーン王碑発見によって構築されていく19世紀末から20世紀初頭の国家イデオロギーの流れを追い、タイの権力者たちが描き出す歴史像と伝統なるもの、王権の存在基盤、ヨーロッパ列強に対抗する論理、中国系移民が示威する民族運動に対抗する固有の民族精神など、今日の「タイ的原理」を形成する過程を、権力者や言論の担い手の言説のなかから明らかにしようとする。

桃木は、初年度に引き続き、ベトナムの小中華型国家意識＝華夷意識について、世界像や歴史像の側面から検討する。今年度中は特に、これまで十分検討されなかった16～18世紀を取り上げ、15世紀までに確立した「南国意識」がどのように変化して19世紀阮朝の有名な小中華意識にたどりついたのかを、主な考察のテーマとする。

渡辺は、ビルマの歴代の王朝の残した史料から、個々の政権の拠って立つ精神的な基盤、支配の正統性の論理を抽出し再構成することによって、歴代の支配者たちの有していた世界像を明らかにし、支配者として君臨する自らの「くに」をその中でどのように位置づけていたのかを考察していく。そして、その分析を通じて、当時の支配者階層が抱いていたであろう国家観を明らかにしようとする。

菅谷は、昨年度の問題関心を引き継ぎ、フィリピンにおける国家意識形成の前提の一つをなすものとして、18世紀中葉以降、中国系メスティーソが植民地社会の階層構造のなかで、いかにして一つの社会集団として顕在化していったかを、この時期の中国人移民社会の変容との関係で、より具体的に明らかにすることを課題とした。昨年度の報告書においても述べたことと関連するが、フィリピン植民地において、メスティーソ人口の大宗を占めた中国系メスティーソは、フィリピン革命につながる民族主義運動およびそれと表裏一体をなす民族共同意識の形成過程において重要な役割を果たした。この意味で、中国系メスティーソがどのような過程を経て18世紀中葉以降、植民地社会における新しい社会集団としてその存在を顕在化させるに至ったのか、なかでもその顕在化の原点を解明することは、フィリピンにおける国家意識の形成過程を跡づける際の重要なポイントとなると思われる。

### 3. 平成6年度の研究経過

平成6年度の研究会を以下のように2回開催した。

10月22日 第1回研究会 於大阪、吉川利治「創られるタイの歴史像—近現代に見る国家意識—」

11月26日 第2回研究会 於大阪、桃木至朗「広南阮氏と『ベトナム国家』」

1. 吉川は、19世紀中葉ラーム四世モンクット王によって発見されたとする13世紀のラームカムヘーン王碑文が、1986年以降に偽物説が出て論争となっていることをすでに昨年度に紹介した。偽作説に対して王家や伝統を重視する学者から猛烈な批判があり、論争が立ち消えてしまったが、逆にラームカムヘーン王碑文が現代にもつ威力、意味の重大さを鮮明した。今年度はさらに考察を深めて、この碑文の発見後に、タイの国家意識がいかに形成されたか、とりわけ、碑文の存在が現実の政治に与えた影響、国家思想の営為に与えた影響を追求した。この碑文のなかで語られる国王と国民、国王と仏教、交易と税制、自由・平等・博愛の思想など、多くの事ながらタイの近代国家のモデルとして提供され、19世紀のモンクット王や20世紀のワチラーウット王らによって、碑文の中の制度や精神を自己の国家統治の理念に取り入れたり、復活させて活性化が試みられという事象を取り上げた。さらに指導的知識人は碑文の精神の取捨選択を行ない、碑文の思想を展開させて、20世紀タイの国家精神「ラック・タイ」やナショナリズムの構築に活かそうとする試みを検証した。

また、科研国際学術調査による1994年12月から1カ月のタイ滞在で、この研究に関する

資料を加えることができた。

2. 桃木は、7～8月に科研費国際学術調査の費用で訪越し、ハノイ、フエ、ホーチミン市で史料収集・研究動向調査にあたった。研究会では「広南阮氏と『ベトナム国家』」と題して報告を行った。近年、南シナ海世界への注目の一環として社会経済史・交易史や政治史の研究が世界的に活発化してきた広南阮氏を、大越＝安南国家（黎朝）の分裂という状況下でどのような国家意識を持ったかという角度から検討しようとしたものである。内容は、中国式国家体制の位置づけを示す道具だてとしての国号、支配者の称号、印璽、国家祭祀などの用いられ方を、「国内」向けと「国外」（東アジア冊封体制とそれ以外）向けにわけて検討し、広南阮氏による自己の位置づけに①あくまで黎朝を正統とする論理（広南阮氏は黎朝の一官僚ないし一地方政権）、②チュア称号や道人号、天王の称号など、黎朝の体系が想定していない称号を使用するような方法で、黎朝を相対化する論理、③黎朝＝鄭氏に挑戦し、あらたな正統王朝を称する論理（王号の自称、独自の対外交渉や冊封体制構築など）、などの三つが並存・交錯しており、広南阮氏自身がそれらの間を揺れ動いたこと、南方の新領土を背景とする②の論理が後のタイソン阮氏、19世紀阮王朝によっても、中国との交渉などに利用されたが（自分と黎朝とは別の国だから、自己の政権樹立は篡奪ではない）、③の方も広南阮氏中期以降に強まっており、結局、15世紀までの大越＝安南国家の枠組みからの決定的離脱はおこらなかった（広南阮氏から19世紀越南国家までいずれも、大越＝安南国家の後身であって後身でないという二重性を持ち続ける）ことなどを論じた。
3. 渡辺は、前年度に明らかにした、ビルマにおける「転輪聖王」概念に見られる有限性の主張を手がかりとして、特にコンバウン朝(1752-1885)の史料中に現れた支配領域の表現形態の同時代性を実証するために、それ以前の他の王朝の史料にみられる表現形態の抽出に着手した。それとの関連で、7月2日に行われた岡山大学東洋史談話会において、「ビルマ・パガンの仏教遺跡について」という題目で研究発表を行い、パガン時代(1044-1287)において仏教が王権の正統性の主張に果たした役割を考察した。
4. 菅谷は、上智大学で開催された第13回国際アジア歴史学者会議において(1994年9月7日) "The Chinese Community in Manila in the Second Half of the 18th Century"と題する発表を行った。本研究発表では、18世紀半ばのアランディア総督に始まり約半世紀にわたって実施されたスペイン政庁の非カトリック中国人追放政策が、中国人移民社会のカトリック化、すなわち脱「中国人化」をもたらし、中国人移民社会がフィリピン社会を正

統に構成する要素となった中国系メスティーソを生み出す母胎となったことを指摘した。また、アランディア総督の非カトリック中国人の追放を可能にした歴史的背景として、南シナ海貿易圏またそれと表裏一体をなす中国人の渡航先としてのマニラの地位の相対的低下とそれを促進したイギリスのマニラ貿易参入があったことを指摘した。さらに、これらの背景には、中国系メスティーソの興隆をもたらす契機となったアランディア総督の非カトリック中国人政策を含めて、スペインの植民地統治政策の転換があったが、これは、実は、スペイン領インディアスを貫くスペインの植民地統治政策の転換の反映したものであった。それゆえ、スペイン支配下のフィリピンの歴史事象を明らかにするためにはここがスペイン領インディアスの一部であったことを無視するわけにはいかず、常にスペイン領インディアスを貫くスペインの植民地統治政策の枠組みのなかにそれらを的確に位置づける必要性を明らかにした。

また、本研究に関連して、1995年2月中旬から3月初旬にフィリピンにおいて調査を行った。特に、歴史的に中国系メスティーソを輩出してきたセブにおいて、旧パリアン地区の現状を確認し、また現在の中国系移住民の社会がどのようなアイデンティティを有しているのかについて調査を行った。

#### 4. 研究の成果とフロンティア

1. 吉川は、ラームカムヘーン王碑文が語る、民衆が国王に直訴できるディーカー制、自由交易、難民・捕虜への平等な扱い、寛容の精神など、ヨーロッパ文明に勝るとも劣らない普遍的な内容を持っていることに発見後の為政者たちが着目し、国家改革の模範となる制度あるいは政策として試みた点を指摘した。モンクット王のディーカー制や自由貿易が挙げられるが、その後の為政者にも、改革の理念として制度の導入を試みた例があるかどうか検証を試みた。また、タイ固有の精神文化の伝統として、タイ的原理「ラック・タイ」として、国王と仏教と民衆の結びつきが強調されていく過程で、ラームカムヘーン王碑文がその要素となり触媒になっていた可能性を考察した。さらに、20世紀の中国系移民の大量流入に対しても、ダムロン親王はタイ族の独立心、同化力、寛容性を強調して、華僑の同化吸収、またワチラーウット王による、華僑のナショナリズムに対抗する精神の高揚を謳ったのも、その原点としたのはこのラームカムヘーン王碑文であったと見る。またタイ国史にとって、タイの光栄ある国家はまずラームカムヘーン王の時代に始まると著述され、国威発揚の目標が示されてきた。これだけの影響力を持ったラームカムヘーン王碑文が偽

作であるとする説が、王室、官民を上げての反論にあって立ち消えになってしまったのも、近代100年の間に構築されてきたタイの政治文化に与える影響が果てしなく大きいからであろう。

2. 桃木は、広南阮氏について、従来日本では検索・利用されていなかった若干の史料（越南開国誌伝などの文献、河中寺碑・天姥寺碑などの碑文の拓本および筆写）を交え、各史料での広南阮氏歴代当主の呼称・称号、日本宛の手紙での自称など、これまで断片的に各研究で触れられてきた事柄のいくつかを、網羅的に考証した。その結果、たとえば、北部の鄭氏の当主が一般に、有名なチュアという呼称で呼ばれながらも、特定の個人をチュア〇〇と呼ぶことがなかったのに対し、広南阮氏では少なくとも5代目まではチュア〇〇の固有名を有したこと（多くの専門研究・概説がこれらを〇〇王と記すのは誤り）、6・7代目についてはチュア・道人・国王など称号が、また大越と安南という国号が、頻繁に揺れ動いたこと等々、称号や国号の細かい変化がある程度明らかになった。これは従来の客観的歴史の研究において軽視されてきた事柄だが、③で述べたような、広南阮氏が自己と黎朝国家をどのように位置づけているたかの検討には、きわめて重要な材料を提供する。その他、客観的歴史の問題としても、清への求封をめぐる広東のブローカーの動き（北京宮廷には広南の情報はほとんど伝わらないうえ、途中から冊封体制のタテマエが現実認識に優先するようになった）など、これまで研究の少なかった広南阮氏の対外関係をめぐる、若干の新しい論点を提出した。これは周辺諸国の中国との交渉に共通する新しい問題点である。
3. 渡辺は、世界像の表象としての「転輪聖王」の概念を窺い知ることのできる史料を分析することによって、コンバウン朝における支配領域についての認識の重層性を明らかにした。すなわち、王が支配する領域、あるいは、支配すべきと考えられていた領域について①山川など自然の地形によってその広がり示そうとするもの、②地方の名あるいは町を列挙することによって領域を表そうとするもの、③支配下にある（ないしは、支配下にあるべき）王を列挙することによってその範囲を示そうとするものなど、様々な表現形態が存在することが明らかになった。もちろん、すべての表現形態をこの分類に適用することはできないし、その境界線に位置するものも多いが、分類モデルとして考えれば、①から③になるにしたがって、支配領域についての認識が「地理的な空間の広がり」によって規定されるものから「人的な支配の連鎖」を基準とするものに変化していくし、その有限性が曖昧なものとなっていくことがわかる。しかしながら、その変化は、時代の変化に対

応するわけでもなく、また、歴史的な事実に関連するわけでもない。こうした認識は同時代に混在する。この混在こそがコンバウン朝の支配者の国家観の一端を明らかにしてくれるものと思われる。すなわち、限定的な地理空間が彼の「くに」であったのではないかと考えられる。

4. 菅谷は、本年度は、イギリスのマニラ占領（1762-64）後に行われた対英協力カトリック中国人の徹底追求を取り上げ、これが先に行われたアランディア総督による非カトリック中国人の追放の結果、脱中国人化していた中国人移民社会にどのような影響を及ぼしたのか、また中国系メスティーソの興隆と具体的にどのように関連していたのかを明らかにした。1766年4月17日付の勅令に基づいて実施された対英協力中国人の追放は、追放対象を対英協力中国人に限ったというよりは、その当時植民地に定住していた中国人カトリック、すなわち、実質的に全中国人居住者を追放対象としたものであった。その結果、バスコ総督が1778年に中国人移民を再受入を開始するまで、約10年間にわたってフィリピン植民地各地から在住中国人の姿が消えることとなった。それまで中国人が主体的に担ってきた諸島内の商品流通網は、この間、スペイン人、メスティーソ、インディオと呼ばれた原住民などの現地商人によって担われざるを得なくなった。なかでも、中国系メスティーソは、追放された中国人の代理人になるなどして、中国人が築いてきた商品網に入り込み、これを維持したと思われる。その後、バスコ総督によって、中国人移民の再受け入れがなされた後も19世紀前葉まで、アランディア総督以来の方針——中国人移民を実質的にカトリックに限る——が堅持されたため、中国人移民社会は、カトリックからなる定住型の社会であった。そのなかで、中国人カトリックと現地女性の正式な婚姻によって、新たな中国系メスティーソが生み出され続けた。また、中国人が小売業に従事することが禁止されたため、中国商人はマニラに集中して、主として卸売り業に特化する一方、地方に居住するのは、農業などを営む中国人となる結果をもたらした。そのため、地方における商品流通は、アランダ総督の追放政策の下で若干の経験を積んでいた中国系メスティーソが担って行くようになったと考えられる。対英協力中国人の追放は、中国系メスティーソの商業的勃興の契機をもたらし、かれらが植民地の階層構造のなかで一つの社会集団として顕在化してくる基礎を築いたといえるのである。

なお、これらの研究は平成7年度に刊行予定のシリーズ『総合的地域研究』において、研究報告として発表を予定している。

## 5. 今後の課題

1. 吉川は、ラームカムヘーン王碑のあまりにも近代的な内容から、果たして13世紀の製作であるか否かという観点からのセーニー・プラーモートの議論を紹介した。もし、発見者とされてきたモンクット王の偽作であるとする説をとるなら、19世紀前葉のヨーロッパ列強の具体的出現が、モンクット王やチュラーロンコーン王にとってどのように認識されたのか、そして自己をどう認識したのか、という「自—他」の認識にかかわる構図をこの碑文をめぐって探ることが可能となる。また、20世紀前葉に大量に流入し、タイの地で民族運動を繰り広げる華僑に対して、タイの為政者や有力知識人が構築するタイ固有の国家原理、タイの側の民族運動のイデオロギーに関する根拠として、再びこの碑文の存在が重要となる。ラームカムヘーン王碑の出現はタイの王政の抜本的な改革を目指し、タイと西洋、タイと中国という国家意識を鮮明にして、文明化への装いを始め、文明国家として20世紀に立ち向かうための作為ではなかったのか。自己言及の語りとして、思想空間にどのような展開がなされたのか、新たな研究の地平が拓かれる。
2. 桃木の研究分野において、広南阮氏（北部の鄭氏も同様）については、研究がまだ遅れている。一方、最近利用可能になった資料の量は膨大である。そこで当面、今年度取り上げたような問題に関する資料を、より広くかつ深く検討することが課題となる。対象としては①ハノイの漢文字喃研究院、フエ遺跡保存事務所などに所蔵される碑文資料や19世紀の野史類などをさらに収集し、それらを通じて、従来の研究の悩みの種であった、広南阮氏に関する基本史料（大南寔録前編、撫辺雜録など）の同時代性が確認できないという点に切り込むいとぐちを見いだす、あわせて19世紀に広南阮氏に関していかなる「歴史の再構成」が行われたかを明らかにする、②案類、地方志、文集など中国の同時代史料（広南阮氏に関しては楊保が簡単に調べた以外、だれも検索していない）の検索を続行し、比較的研究の進んでいる中日、中琉、中暹などの関係史研究と比較しつつ、中越双方の情報の流れ、認識と位置づけ、交渉の論理などを明らかにする、などが主である。
3. 渡辺は、上記の研究で得られたコンバウン朝における支配領域認識の重層性が、それ以前のビルマの各王朝にも見られる認識であるのか、それとも、イギリスなど西洋諸国との交渉が様々な形で活発になり最終的にはイギリスの植民地となっていくコンバウン王朝という特殊な時代背景の中で生まれたものなのかを検証していくことを最大の課題とする。そのためには、歴代の各王朝の支配領域認識の表現形態を明らかにしていくことはもちろんのこと、そうした表現形態の根源にあると思われる古代インドおよびスリランカにおけ



る王権の正統性の論理の解明が重要になってくる。また、より広い視野の中で、支配領域観念の有限性、無限性の認識と混在という観念から、タイ、ベトナムなどとの共通性、固有性を探っていく比較総合化が、求められていく課題となるであろう。

4. 菅谷は、今後の課題として、中国系メスティーソがまず一つの社会集団として植民地社会の階層構造のなかに顕在化してくる歴史的背景として、18世紀後期におけるマニラの中国人移民社会の変容の具体的諸相を引き続き鮮明にする作業を行われねばならない。本年度は、フィリピン各古文書館所蔵文献の整理・分析作業に着手したが、さらにその作業を継続し、また、フィリピン各古文書館所蔵文献との比較対照を通じて、史料批判を行いそれぞれの史料の視点・歪みを明らかにし、史実の把握に努める必要がある。また、菅谷は、基本的に中国系メスティーソは、18世紀中葉以降に一つの社会集団として植民地の階層構造のなかに顕在化した後、19世紀後葉から末葉にかけての民族共同意識の形成過程のなかで、次第に「フィリピン人」そのものとなっていったと考えるが、この問題は、中国系メスティーソのアイデンティティの在り方と密接な関わりをもっている。それゆえ文献史料に基づく歴史学的な手法によって、常に主観的、相対的な価値と関連するアイデンティティの問題、すなわち、中国系メスティーソのアイデンティティの在り方あるいはその変容に、どれだけ肉薄できるのかが今後の大きな課題となると思われる。

## 6. 研究業績（平成6年度分）

### 吉川利治

『泰緬鉄道 機密文書が明かすアジア太平洋戦争』同文館、1994.

「新たな日本人町と「リトルバンコク」——タイの日本人と日本のタイ人」小野沢正喜編『アジア読本 タイ』河出書房新社、pp. 272-279, 1994.

「タイとの交流」綾部恒雄・石井米雄共編『もっと知りたいタイ第2版』弘文堂、pp. 265-294, 1995.

### 桃木至朗

「ヴィエトナム前近代史の時代区分」『古代文化』46-11:48-54, 1994.

『チャンパ王国の遺跡と文化』トヨタ財団、1994.（重枝豊と共編著）

### 菅谷成子

「マニラの日本人—スペイン植民地の中国帆船貿易」『国際交流』62:88-91, 1994.

「18世紀中葉フィリピンにおける中国人移民社会の変容と中国系メスティーソの興隆——対英協力中国人の追放をめぐる——」『東洋学報』76-3・4:1-32, 1995.

「フィリピンにやってきた中国人——スペイン植民地時代——」宮本勝・寺田勇文共編『アジア読本 フィリピン』河出書房新社、pp. 192-199, 1994.

「メキシコとフィリピン」歴史学研究会編『講座世界史世界史とは何か——多元的世界の接触の転機』第1巻、東京大学出版会、pp. 203-228, 1995.